

＜協同のひろば＞ 「第1回埼玉協同のつどい」をおえて

## 拡がりはじめた「埼玉」での協同

川地 素 睿 (日本労働者協同組合連合会・センター事業団東関東事業本部)

新年早々の1月14日、浦和市民会館で「埼玉協同のつどい」が開かれました。肌寒い風のふく日でしたが、用意していた資料もなくなる程の盛況。約150名の参加で熱気あふれる1日になりました。

この「つどい」は、「病院で死ぬということ」の映画上映運動で知り合った菊池陽子さんや増田アツミさんと、埼玉でも協同集会みたいなものを作りたいね——との一言が、はじまりでした。

昨年6月15日、第1回目の実行委員会を20名の参加で開いてから、協同総研の協力も得て、次の点をポイントに準備をすすめました。

- ・協同の姿が見えなくなっている。協同の姿が具体的にみえる集会にしよう。
- ・地域の新しい力として、さまざまな協同を大切に、掘りおこしたい。
- ・個人の参加とつながりを大事にし誰でもが参加できる実行委員会で、考えをだしあっていく。
- ・協同と気づいていない協同の実践もある。協同という名称だけにこだわらず、よびかけていく。

実行委員会には、食・環境・子育て・建設・生活と健康・生協・農業・障害者・福祉・高齢者・国際・社会運動・労協など、さまざまな分野からの参加で、ときには「協同」ということそのものだけで討論したり、新しい人の参加で何度もくりかえしたりしましたが、そのたびにあたらしい発見と人とのつながりが拡がり充実したものになりました。

気がついてみると、もう10月。とにかく構想をはっきりさせ、呼びかけはじめたのが、12月。当日は、大学は入試。各団体も会議や新年の行事が多く、成人式の前日で大いに気がもめました。

「つどい」の当日は、「手づくりしんぶんフェスティバル94」「さいたま95文化協同交流フェス

ティバル」が並行して開催され、ホールでは300名の子供と親、大人が文化行事をたのしみ、とくに障害児の学童保育の取組が感動をよびました。

全体会は、教育学者の大田堯先生と太田貞司先生をむかえ、菅野正純氏の司会で「協同の息吹で人間らしく暮らせる地域づくりを」をテーマにして大胆で熱意にあふれた集会になりました。

大田先生は、法隆寺をつくった宮大工の樹の命とのつきあいから話をはじめられ、人間のひとりひとりの多様性を認めあうこと、そのことを前提にして協同があること。協同とは、他人の身になって考える能力のひろさと深さからはじまること。地域は、人間になる〔ゆりかご〕であり、高齢化社会は身近なつきあいがもっと必要になると、地域からの人間再生にもふれられ、ベンボスタ子供共和国（スペイン）の

つよい者は下に よわい者は上に

そして子供たち（と高齢者）はもっと上という言葉を紹介されました。

太田貞司先生は障害をもった高齢者の実態から地域ケアの課題にふれ、生活をささえる最低限の条件——ケアミニマムが充分保証されない厚生省のいう在宅福祉とゴールドプランの欺瞞を具体的に分析されました。ご自身が、地域でケアに関わってこられたので、じつに説得的で、高齢者が2～3回、施設や病院をまわされる中でほとんどが死亡していく事実と高齢化社会への対応・見通しがほとんど実態に即してないことに驚かされました。

お二人の話をきいて、「協同」ということが、人と物との多様性をとりもどし、生かすものであること。どんなひとでも人間として自分の人生をもつということの大切さ。協同でそれを支える理念とシステム、仕事が切実にのぞまれていること

を、改めて確信しました。

午後、4つの分科会がありました。第1分科会は「協同の力で築くゆたかな地域福祉」、第2分科会は「健康・農業・環境を守る協同のいとなみ」第3分科会は「子育て・教育・文化を協同の力で」第4分科会は「協同の力で仕事おこしを考える」を、それぞれテーマにかかげて30名前後の参加でひらかれ、私は「仕事おこし」の第4分科会に参加しました。

第4分科会は、コメンテーターに、菅野正純氏（協同総研）と手島繁一氏（法政大学）を迎え、司会は、外谷富二男さん（エコテック）にお願いしました。

この分科会は、この「つどい」で熱く語られ論議されている協同の理念と運動を、実際に「仕事」と言う形で顕在化させ、支えている実践を報告していただくとう4人の方から報告をしていただきました。

最初に私が、「人と地域が必要とする仕事」を働くもの自らの手で興し、新しい労働の在り方・社会の在り方をかえていきたい、と前置きして大量生産方式、大量消費・大量廃棄の大企業中心の経済が、もはや有効たりえないこと。対抗軸としての協同組合経営。公・協の複合体も視野にいった第三のセクター・非営利の事業体が21世紀にむけて飛躍するであろうこと。そのために今地域との関わりの中で、労働者協同組合が「仕事のセンター」でありたいと、思いを報告しました。

障害者職業センターの赤岩潔志さんは、障害者の就業の厳しい現状にふれ「例えば、今まであった電話交換の仕事もコンピューターにとってかわられ社会のなかでくらすことがますますせまらされている。生きていくことは、人間として地域で社会で、豊かにくらすこと。障害者の状況に応じた多様な仕事をつくりたい。」と話されました。

地域の協同組合が、もっと集まり知恵と力をだしあって協同の仕事づくりを志向することがもっ

ともっとやられることが、必要なのではないかと切実に思いました。

浦和でお弁当の事業をしている、ワーカーズコレクティブ旬の井滝佐智子さんの報告は、示唆に富んでいて参加者の関心を集めました。

「なんでお弁当をやりはじめたの、とよく聞かれます。」「なにもしらずにたまたまはじめたんです。長年主婦としてやってきたので、食事づくりならできると思いました。企業で働くとなるとパートしかなく、35歳でくぎられてしまうので希望を生かす仕事は不可能にちかい。転々と職を変えている人が多い。だから、自分で仕事をつくってみた。雇い雇われる関係がないのがいい。同時に自分の努力で一步を踏み出せない人はワーカーズになれないのではないか。」と仕事の在り方にもふれられ、今後は地域にもっと出ていきたいとむすばれました。

つばさ流通は、ダンプで産直や引っ越しの仕事をしている協同の事業体です。埼玉の責任者の斉藤要二さんが報告されました。もともとが、経営者が会社を潰そうとしたので、こっちから経営者の首を切り、みんなが出資金200万円をだしあってはじめ10年経った。いまだにマニュアルもなんもない。よくやってこれたなあと思う。皆の溜まり場があるので、わいわいやりながら仕事の割りふりも決まっていく。ただ運ぶだけでなく喜んでもらう。自前の資金でひもつきにならない。赤字経営にはしない——をモットーにしている。

マニュアル人間でなく、仕事を通じて確実に受けつぐ文化を育てていること。わいわいやりながらやる仕事のありかたに、なんだか懐かしい思いがしました。

報告のあと、コメンテーターのお二人からコメントがありました。

20世紀は大不況の中から、今の経済システムを選んだ。21世紀はどうなるのか。

本来あるべき労働・社会が失われている時だか

らこそ、新しい経済主体がのぞまれるのではないか。人間の手による対人サービスは、協同だからこそできる。それを教育・福祉・医療・芸術の分野でネットしていけるのではないか。〔手島さん〕

また、菅野さんは、資本形成や配分においても主人公になるような仕事の在り方に挑戦することが大切だ。日々の労働のくみ方が合意に繋がっているかどうか。仕事の特質を打ち出していくことが必要だと話されました。

参加者からは問題提起もたくさん出されました。

・お豆腐づくりを計画している。将来は旬の様な老人給食もやりたい。協同購入・協同出资方式にこだわりたい。(センター事業団・岡元さん)

・障害者が3分の1いる現場を運営している。地域のなかで、地域に住み、地域で生きていく障害者協同組合を、障害者・親・先生・地域の人たちでつくってきたい。(センター事業団・羽賀さん)

・まだまだ小さく初歩的だが、大きな展望がある。もっと日常的に交流できる状況が必要ではないか。フェイス・トゥ・フェイスの組織がいい。仕事の連携で大きなネットワークを考える事が必要でないか。(労金・杉本さん)

・人間にとってよこびになるような資本と労働。分業と個性をいかした協働をもっと考えてみることも必要。(大東文化大・太田さん)

・共同保育に関わっている。エンゼルプランも出ている、今新しい在り方が問われている。安易な民間委託でなく自分たちが提案し変えていく。自分たちの仕事をつうじて、自分たちを律していく。働き方を変えていく。(所沢・春口さん)

発言と討論を通じて、共通しているのは、今までの経済や社会の枠組みでは、問題の解決の方向が見出せなくなっていること。まだ、小さいけれど、協同組合と協同組合事業が希望を託せる存在になりつつあること。埼玉でも雇い雇われる関係のない新しい労働の在り方が生き生きと進んでいることが確認されたと思います。

あと5年で迎える21世紀を協同の世紀にするためにも、日本全国の地域のあちこちで協同組合間の協同の仕事おこしをはじめること、地域の協同を望む人達とのおおきなネットワークをつくることが、いま切実に望まれています。

この分科会を第一歩にして、懇談を深め、協同を掘り起こし、「仕事づくり」の集会をもちたいと思います。

---

<協同のひろば> 「第1回埼玉協同のつどい」をおえて

---

## 「地域づくり政策」「地域間協同」「協同の法制化」へ

広瀬 謙一 (協同総合研究所・事務局長)

自覚的な市民たちが協同の真の意味を問い直す 今回の「埼玉協同のつどい」には151名の人々が多様な分野から参加をしてきた。

特に子育て・教育分野から多数の参加があり、つどいと並行して地域子ども・青年・教師らが大会場舞台上で合唱や構成劇に取り組んだ「子育て文化協同フォーラム」が開催され、会館は協同をめぐる人々で埋めつくされた。1991年末に開催された「子育て文化協同全国集会」の取り組み

から生まれた、「さいたま子育て文化協同運動」が大きな力を発揮したといえる。

また既存の協同組合運動にあきたらず、それをさらに発展させる新しい協同のあり方を探り、地域での生活の再生と文化づくり、そのための学びあいを追究する「生活文化・地域協同研究会」もつどいを支える中心となった。

同様な運動母体は県内各地に生まれはじめ、そこにはく生活や文化、子育てや教育、福祉や医療、環境>など私営営利企業もやらない、公的な行政